

第9回基本政策部会 議事録

1. 日時

令和2年3月27日（金） 15:00～17:00

2. 場所

中央合同庁舎第8号館8階 特別中会議室

3. 出席者

(1) 委員

中須賀部会長、松井部会長代理、青木委員、石田委員、片岡委員、栗原委員、白坂委員、角南委員、常田委員

(2) 事務局

宇宙開発戦略推進事務局 松尾事務局長、行松審議官、吉田参事官、中里参事官、鈴木参事官、滝澤参事官

(3) オブザーバ

葛西宇宙政策委員長、折木宇宙政策委員、山崎宇宙政策委員、平内閣府副大臣、和泉内閣総理大臣補佐官、山川 JAXA 理事長

(4) 関係府省等

内閣官房 国家安全保障局 富川企画官、内閣衛星情報センター 今西総務課長、内閣府 総合海洋政策推進事務局 森下参事官、総務省 森下宇宙通信政策課長、外務省 山地宇宙・海洋安全保障政策室長、文部科学省 藤吉宇宙開発利用課長、農林水産省 松本技術政策室長、経済産業省 浅井宇宙産業室長、環境省 吉川脱炭素化イノベーション研究調査室長、防衛省松本戦略企画課長

4. 議事要旨 （○：質問・意見等 ●：回答）

(1) 宇宙基本計画（案）について

資料1に基づき、「宇宙基本計画（案）」について事務局からの説明があり、委員より以下の意見があった。本「宇宙基本計画（案）」を基本政策部会としてとりまとめ、宇宙政策委員会に報告することとした。

○白坂委員 基本的に反映されているので、大きな指摘はない。14ページの「災害対策・国土強靱化や地球規模課題の解決への貢献」の「地球規模課題の解決への貢献」について、宇宙を活用してSDGsにどれくらい貢献できそうか検討しているのだが、気候変動だけではなく、かなり幅広く活用価値がある、と世界中で発表されている。しかし、本文においてSDGsについては具体的に書かれていない。16ページの「地球観測衛星・センサ」の中の文科省担当の箇所のみである。もっと広く使えるはずで、世界でも幅広く使われている中で、日本としてもSDGsを進めていくことを強化すべきではないか。「基本的な考え方」の中に「SDGsの達成に貢献する」とあるが、その次の「主な取組」の中に明確に出てこない。16ページの「防災、国土強靱化、気候変動等の地球規模課題の解決に貢献する」では、SDGsという言い方ではなく、「地球規模課題への貢献」という書き方にはなっているが、ここで何とか読み取ることもできるが、もっと強く言ってもいいのではないか。「衛星データの活用」においては、「災害対策・国土強靱化」のみ

に限って書いてあるので、本当はここと同じぐらいのレベル感で記載すべきである。世界のトレンドであり、日本政府が目指す方向からしても強調すべきである。それは宇宙をイネーブラーとして考えたときに、宇宙予算だけでなく、いろいろなところの予算を活用しながら活動されていくべきである。手段としての衛星というよりは、目的としてSDGsに貢献することについて、より言及されるべきである。

○吉田参事官 SDGsについては、この審議会の中の議論で頂いたので、こういう形で書いている。まず「基本的な考え方」に入れているので、当然全体に係っているという理解である。具体例をもう少し書いたほうが良いということであれば、具体的な修正案を頂きたい。今のところ「基本的な考え方」でしっかり位置づけているという理解である。

○山崎宇宙政策委員 今までの議論をきちんと反映していただいている。16ページの3行目から8行目の「地球環境データの利用」について、防災、国土強靱化、気候変動等と幅広い社会課題の解決につながるため、文部科学省に加え、他の省庁も含めるという意味で「等」を加えていただいた。今後検討を進めていく中で、よりはっきりとどの省庁が関わっていくということが見えてきた段階で、工程表の毎年の改訂の中でより具体化に関係省庁について反映していただきたい。現状はまだ見えていない部分もあるかもしれないが、入れられるところは入れて、今後毎年の見直しの中で反映できるところはしていただきたい。同じページの24行目から30行目の「災害対策・国土強靱化」について、別の項目でもあり、そこでは「社会実装を行う」と書かれている点は非常に評価できる。

○吉田参事官 工程表については今回の本文にも現行の計画の記述を引き継いでおり、常に進化し続ける基本計画にするために工程表がある。そういったところは工程表の中で実現していきたい。

○常田委員 10ページの真ん中辺り、工程表の位置づけで、「状況変化等に応じた柔軟な見直しや追加等を行い」とあり、ダイナミックに状況が変化する時代にはいい記述だが、今まで、宇宙科学・探査小委員会や宇宙科学コミュニティには、「工程表は非常に重いもので、1回決めたら技術開発に難航しても工程表を踏み抜くことは大変迷惑をかける」という姿勢を言ってきたし、宇宙研もそう思ってやってきた。それが、工程表が動き過ぎると、そのよりどころがなくなるのではないかという危惧と、予算が限られている中で、予算の理由で工程表も後れていくことが発生しかねない。工程表の打ち上げ年を表す三角点を動かさないで、これまで頑張ってきたところもあるので、工程表をある程度フレキシブルにしなければならない面と、フレキシブル過ぎることへの危惧がある。また「失敗を恐れず」という言葉が2か所あるが、26ページの衛星開発について、「失敗を恐れず、タイムリーに実証を繰り返し」とあり、試作段階でそういう記述はいいかと思う。しかし、17ページの宇宙科学について、「①基本的な考え方」の中に「失敗を恐れず挑戦できる環境作りを重視する」と書かれており、従来現場では「絶対失敗するな」と言ってきたので、そのバランスが難しい。試作的なものと、失敗してはならないものを分けるべきではないか。それでも不具合は起こるので、失敗してもいいと思われぬようにしたい。

○中須賀部会長 「失敗を恐れず」というのは、プログラム化している中で、最終ゴールではなく、そこに至るまでの技術開発の段階においての失敗については許容し、どんどん新しく挑戦しなければいけない。そういうニュアンスで考えてこれから運用していきたい。

○吉田参事官 工程表のバランスについては、各部会の先生方と工程表をつくっていく段階でまた議論させていただきたい。よいバランスで運営していくことが大事である。

○中須賀部会長 特にないようであれば、基本計画に関しての議論はこれで終わりにしたい。今日は部会として一つの区切りになるので、各委員からこれまでの議論やこの基本計画でできた流れを踏まえ、今後さらに取り組むべきことを含めて、順番に一言ずつ発言いただきたい。

○青木委員 歴史的意義のある宇宙基本計画の検討において、基本政策部会のメンバーとして関わられたことは本当に光栄なこと。歴史的意義があるとは、まず日本の方向性が非常に明確に打ち出されていると思う。「インド太平洋地域の平和と安全を維持する」ということ、そこに「日米宇宙協力を一層強化していく」。ここをまず最初に書いてあり、その指針が明確に打ち出されているので、その後そのために何をしなければいけないのかということが具体的になる。そして現状把握が適切である。現実を重視して、きれいごとではなく、日本としては必ずしも愉快ではない事実を記載している。それが悲観的なものでもないというところで、現実主義に基づいたよい現実把握がなされている。その上で、宇宙政策の目標、具体的なアプローチというところで、これまでの3回の計画に比べてもより一層具体的であるというところは非常に評価できる。抽象的に何かをするというのではなく、できる限りどのような事項を、どのような時期に、どのように行うのかというところ。具体的な数値を入れることができないところは、「可能な限り時期を明示した具体的なロードマップを策定」という加筆の部分があった。日本の方向性が明確、現状把握が適切、宇宙政策の目標、具体的なアプローチが具体的になっていて、それに基づいて実行していける。さらにそれを工程表という形で常に進化させていくことができるというところが、すばらしい歴史的な意義のあるものである。

○石田委員 民生利用部会に4年前からお世話になり、基本計画改定に初めて関わらせていただき、包括的に日本の宇宙政策に関する議論に関与できたことはとても光栄であり、委員の皆様やほかの領域の専門家の方々の意見から学ぶことが多く、非常によい機会だった。この基本計画を通して、宇宙というのはこれまでは国がリードしてきて、ある意味夢と存在感でその意義を主張してきたが、今、社会情勢含めて、地上の経済や社会に明確に貢献をしていかないと、その意義が立証されにくい時代になってきている。安全保障に対する明確な貢献というのが一つあると思い、自分の専門分野で言えば、経済成長やSDGs、イノベーションといったものに対して、「貢献」という言葉では弱く、それを実現していくというところに明確にコミットしていかないと正統性がなくなっていく時代である。自分の日々の活動の中でもそうしたい。一方、今回の基本計画の中で安全保障、科学、産業それぞれの面で非常に力強い前向きなアクションが書かれているが、一番の問題はそれを実現するための人とお金というリソースがこれまでと変わらないとすれば、成り立たない。人というものもあるが、お金の面で言えば、日本の政府の予算というのは、アメリカと比較して15分の1しかないのが現実であり、民間のリスクマネーが最近増えてはいるが、日本では年間150億円、200億円ぐらい流れており、立派な流れではあるが、世界全体では年間2000億から3000億流れているわけで、世界シェアの10%にも至っていない。この産業は、今回の政府の公式見解とは別に、個人的には世界シェアの10%は取れる産業と思い、その先には20%とか25%取れる可能性がある産業で、結果として日本経済や社会課題にもっと貢献できると思っている。それを実現するには官も民ももっと成長の資本を投下しなければいけない。民間としてできることは民間で頑張っていくので、政府としてできる人と金の投下を、この基本計画の実現のためにもぜひお願いしたい。最後に、今、世界、日本中の全員が非常に苦しい時期を過ごしている中で、宇宙が今この瞬間でできることは何かないかと考えている。衛星等が社会課題やSDGsに貢献できるのだとうたうのであれば、今この瞬間役立たなくて、いつ

役に立つのかという非常事態である。今回の基本計画の考えを基に自分なりに考えて行動していく。

○片岡委員 安全保障の立場からコメントする。短期間で新たな宇宙基本計画案の策定、具体的に書き込んでいるいい計画になっていると思う。現在の基本計画の策定のときからタッチしているが、前回の策定も非常にタイミングがよい時期に安全保障を重視した形に策定していた。アメリカが一国での宇宙優勢を築くことはなかなか難しくなってきたので、多国間協働をしないとかならないとかじを切った時期である。さらに宇宙の脅威が強くなってきたということを認識した時期なので、非常にいいタイミングである。その後、具体的には SSA を中心にして準天頂衛星等の宇宙安全保障が前進した。さらに新たな防衛大綱、そして新たな中期防衛力整備計画等とマッチングして非常に大きく前進した。大きな一歩を遂げていると考える。新たな基本計画は、現基本計画に比べ非常に多く書き込まれており、内容が充実している。今までの安全保障の方向性をより確実にすることが非常に重要である。また、これから宇宙の活動領域が拡大し、静止軌道より拡大していく方向にも安全保障としても関心を持っていく必要がある。その基礎がこの基本計画にも書き込まれている。今回の基本計画が GPS の脆弱性が非常に叫ばれている時期に策定され、また米国の国際宇宙探査の提案があった時期でもあり、技術的革新のテンポが非常に速い時期にタイミングよく新たな計画を策定できたと考えている。宇宙安全保障にとっても、支える強固な産業科学技術基盤が必要なので、特に今回「基本的なスタンス」を書き込んだことが非常に大きく、画期的である。また、将来の宇宙輸送システムの研究開発に有人や安全保障も考えていくということで、拡大する宇宙へアクセスする基本的なことが組み込まれている。足がかりになるのではないかな。非常にいい計画なので、これから着実に進めたい。毎年現計画を見直しているが、PDCA、やった内容、計画をチェックし、評価し、アクションするというサイクルが必要である。かなりの部分が今後策定する工程表、ロードマップや長期ビジョンで内容を詰めることになるので、ここに具体的な時期を明示すること、「必要な措置を講ずる」と書き込まれた箇所の「必要な措置」を早急に詰めていく必要がある。安全保障の部分から、大きく前進した中では宇宙基本計画、それから宇宙政策委員会、宇宙開発戦略推進事務局の役割は非常に大きいと考えている。

○栗原委員 基本政策部会で皆様と議論できたこと、それから新しい宇宙基本計画の策定に関わらせていただいたことを大変光栄に思う。前文については、この計画を立てる際にどういう姿勢で臨むかということが先にあってもよかったと思うが、議論の中で最終的にこの前文ができ上がってきたと思い、それはそれでその議論を深めた結果であり、次のフェーズの立脚点がここに表されたということは、大変意義深いと思う。ここで表されたことは、常々問題意識としてあった次の 10 年の前提として、宇宙が他のものと違う次元、異なる世界ではなく、安全保障上も大変重要で、社会経済面でもその一部になっているということを表している。宇宙産業と言うと、独立した成長分野と言われるが、単独で存在しているのではなく、むしろ宇宙が基盤となり、他の社会や経済、産業を構築していくものということがここで表されている。そういう視点で次のフェーズで宇宙というものを取り上げていただいたのではないかな。このことがこの前文に表現されている。私がこの会に参加したバックグラウンドとして、産業面での発展、新規事業の創出、金融という視点を軸にして参加したが、金融、その中でもリスクマネーの供給に関しては、どうリスクマネーを供給するかという手法論ではなく、資金が流れていく環境として市場の予見性が高まることが重要ということが書かれている。また民間の既存の企業と新規事業、オールドとニューとも言われているが、そこでの新しい結びつきが必要だ

ということも入っている。民ができることは民に、他方、国のサポートやアンカーテナンシーという役割も重要である。どう適切に役割分担していくか、連携していくかが必要ということも書かれている。今後発展していくためにユーザーのニーズを取り入れていくという一文が入ったことも大変意義がある。金融の供給者としては、資金供給は拡大しているが、まだまだ本格化しているというレベルではなく、まだ実験的に投資をしているというレベルだと思う。層も薄く金額も少ないので、先行するいろいろな投資機関が呼び水となって広げていき、知見のある機関と連携していくこと、またそれをつなぐ人材育成も重要である。内外の投資家とうまく連携していくことについては、金融の分野で意識的に行っていく必要がある。最後に、今後、戦略的・集中的にこの基本計画をベースに取り組んでいくことも重要だが、先を見て長い成長支援が大事である。もう一点、これを様々な分野や主体に浸透させていきたい。

○白坂委員 私はこの業界の人間で、いわゆるオールドとニューとアカデミアと全部を経験してきた中で今、感じていることは、変化の速さが一世代前の変化と全然違う。もちろん、常に変化はしているが、今の変化の速さは、基本計画の議論をしている間ですら状況が変わっていったような感覚を持っている。まさに今、コロナがあり、国の委員会で議論しているが、アフターコロナという話がもう既に出始めており、このコロナを経験したからこそまた変わるということが言われている。そういう意味で、この基本計画で、方向性は見えているが、次に具体策に落とし込んでいくことについては、環境を見ながら変わっていかざるを得なくなってくるだろう。そういう意味で、様々な方向性を見せながら、国としての方向性を示しており、しかも具体的に書かれている。これを次の工程表に落とし込むチャンスがある。これは今までこの業界にずっといた人間の常識で考えてはいけないうちにあると思う。違う産業との掛け合わせ、連携が大きく、宇宙だけが独立していた時代はもう終わっている。そういう意味で既存の枠を超えた形でこの先の工程表を考え、さらに世界についていく、追いついていくイメージでなく、線として変えていく意識を持って。特に今回は宇宙科学・探査では新しい概念を出しているので、日本として様々なところに出していくことをやれるようにしていかなければいけない。そういったベースを基に実行に移していくことを重視しなければいけない。この工程表に落とし込むこともそうだが、これをしっかり実現しようとすると、どうしても既存の宇宙予算だけではうまくいかないのも、もちろん宇宙予算の拡大もやる必要があり、SDGsについても、イネーブラーとして考えたときに、宇宙予算でないところの実現、貢献を実施し、予算の獲得と実践と実行をやっていかなければいけない。工程表をつくることもそうだが、予算を取っていくことも、もちろん我々が外に働きかけることも、宇宙予算の拡大、それ以外との連携、それを活用してイネーブラーとしての宇宙の活用をしていきたい。

○中須賀部会長 人ごとではない。手伝ってほしい。

○角南委員 このコロナの影響で国際会議もなく、出張もないので、Zoom 会議などでポストコロナの時代に向けた議論を始めている。私自身は国際政治というバックグラウンドがあるが、もしコロナの影響を先のスペイン風邪や、先の大戦と比較するようなことであるのであれば、その後に必ず新しい国際秩序が生まれる。このことを考えたときに、改めて今回の計画を読み、ポストコロナの時代で新たな国際秩序が生まれるに際して、これがどういう意味合いがあるか考え読み見直したが、本当によくできている。ここに書かれてあることが非常に重要な要素として、国際社会においての、ポストコロナの時代においての我が国の一つの指針になるだろう。私は先端科学技術をずっと追っているのも、そういう意味でサイバー空間と宇宙空間で新たな国際秩序の構築をめぐる様々

な動きが起きるだろうと想定する。今回の計画に書かれている、特に探査も含めたサイエンスと現実的な安全保障という様々な柱が非常に重要になってくる。先日もアメリカではキャンベルがもうアメリカの覇権は終わりと言い、アメリカ自身が大変な状況になっている中で、日米協力の中での宇宙や、サイバースペースで言うとデータという戦略もあるので、まさに我が国がどういうふうにもポストコロナの時代をつくっていくのか。それが期待される分野だと思う。今回この作業に関わらせていただいたことで私自身も非常に勉強になったし、こういった問題を考える非常にいいベースにさせていただいた。なので工程表もまさにスピード感を考えれば、ポストコロナに対応するスピード感を持ってやっていかなければいけない。ぜひ平副大臣には日本政府の外交、国際社会において、これだけのことを国内で議論しているので、世界に対してメッセージをどんどん出していきたい。今、目の前の問題をとにかく解決しなければいけないというときに、これからの未来を宇宙、サイバーという世界で引っ張っていくような、そんなメッセージをしていただき、日本のプレゼンスをしっかりと、あるいは社会に対して貢献していただければと思う。

○常田委員 全体として大変よくできた新宇宙基本計画と思う。前文も力強く、メッセージがはっきり出ている。なぜ日本は宇宙をやらなければいけないのかということが書かれており、その中に宇宙探査による深宇宙の探査、それから宇宙は科学のフロンティアとして大事であるということが最初のほうにはっきり書かれたことは大変光栄なこと。また自らの弱点を認めているところがあり、後れを取りつつあり挽回しなければいけないということが書かれて、今までの総括に基づいてこれが書かれているというのが前文に出ているということで、大変いい。後のほうに「多様な国益への貢献」ということで、幾つか項目があるが、その中に「宇宙科学・探査による新たな知の創造」ということが入っており、前の計画ではこういう記述はなかったので、科学者は多額のお金を使って宇宙科学をやっているのに、こういう観点からの認識が深まるのは良いことと思う。最後の2章の宇宙政策の目標の後半の(2)で総合的基盤の強化ということで、いろんな活動を支えるには技術開発、先端技術の開発、人材育成が大事であることも入っており、ありがたいことである。それから、「はやぶさ2」を中心として、宇宙科学は今、大変うまくいっているが、天文学的な面も2か所入っており、これも今後ぜひ頑張っていきたい。

○折木宇宙政策委員 今回の基本計画は、本当に必要なこと、重要なことを多角的に表現しており、取り組まれていて、すばらしいものを取りまとめていただいた。そういう中で、安全保障に関して申し上げれば、宇宙における安全保障は、軍事的な側面だけでなく、広義の意味の安全保障はとても大事である。そういう面言えば、中国の問題とかロシアの問題とか、もちろん米国の問題もそうだが、これからますます安全保障的な観点からの宇宙の捉え方が大事になってくる。それから、前文の後ろの4行というのは、本当の絞りの文章になっており、ここが本当のエキスポだと思っているが、一方で、これから実効性やスピードの2点の話がある。実効性については、これから進めていく事業の中で各主務官庁があるが、これは官民だけの連携だけでなく、各省庁間の連携、縦割りのところにどうやって横串を刺して効率的にやっていくかということを真剣に考えていかないと、効率性を求められない。研究開発からでき上がりの部分まで含め、その付近のところをこれからより一層省庁間連携でやっていただきたい。もう一点のスピードについては、もちろん全てすぐできる事業ではないが、世の中は技術も含めてどんどん進んでいる。それに追いついていかなければいけないので、そのスタンスが非常に大事である。その根っこは何かというと、やはり金、予算である。そういう面で、「政府を挙

げて宇宙政策を強化していく」という文章になっているので、ぜひ政府全体で支援すべきであり、ボトムアップで予算を積み上げていくことはかなりきつい部分もあり、制約を受けている部分がかかなりあり、伸びないという難しさもある。ぜひその付近のところを政府も強力に進めていただきたい。

○山崎宇宙政策委員 前回の改訂と大きく違うことが様々あるが、とにかくプレーヤーが増えてきた。国にしても民間の企業にしても増えてきた。その中で同盟国、友好国と日本がどのように関係を構築していくか。それから宇宙も使った外交がより大切になってくる。アジア、中東などでも宇宙開発に取り組んでいるところが増えてきているが、宇宙開発をすることによって、10年後、20年後、国を担う人材を育てたい意図がある。そういった思いを込めて宇宙開発に取り組んでいる国が増えてきている。ここでまとめた宇宙基本計画の理念を基に、日本としてもどのような国になりたいのか、ほかの施策と連携を取っていくことが大切である。そのために宇宙が社会に開かれた実装の時期であり、開発と利用ユーザーが一体になることが大切である。例えば輸送系においても今回抜本的な低コスト化ということがうたわれている。これは非常に大切なことで、そのために一つのドライバーとして「二地点高速輸送」「有人輸送」なども記述されているが、何をどの目的で運んでいくか。ユーザーと一体となった開発がこれから必要になってくる。低コスト化が進めば大型構造物あるいは人工衛星。より宇宙の利活用が進んでくる。これも相乗効果である。人工衛星データ、無重力環境利用などにおいても、社会課題を実装するに当たって、実装に関する課題として、実証まではいいが、実装の段階になると、どうしてもコストがネックになるという話も多々伺っている。それに当たっては、ユーザー省庁の力も頂いた上で、きちんと予算を獲得して、実装に至るまで予算確保することがますます大切になってくる。また、国際宇宙探査、アルテミスなどにおいても、政府全体となった取組が大切になるので、今後はより省庁間の連携を取れるようにしていただきたい。ユーザー省庁、民間を併せた、より参入しやすい制度づくりが必要になってくる。コロナの影響がある中だからこそ、日頃からこうした社会実装に向けた体制づくりが進んでいると、いざというときのスピードアップにもつながってくる。今、いろいろな意味で非連続の時期かもしれない。この機にぜひ社会実装に向けた横断的な取組を加速できればと期待している。

○松井部会長代理 10年以上前から関わってきているが、方向性としては宇宙の開発研究から安全保障、民間活用という方向性に変える、ということが最初の目標だった。その中で具体的な成果として準天頂を整備し、関わってきた中で一番大きな成果は、準天頂7機体制に向けて整備が進んで、宇宙が社会実装と非常に深い関わりがあることを示したことである。これが初期、改訂前の大きな成果とすると、今後新しい基本計画改訂案がどういう方向性を示せるか。安全保障の中身が当時と大分変わってきた。そもそも当時は宇宙が戦闘の場という認識はなく、さらに戦闘の場が月軌道まで広がるという認識など全くなかった。そういう中でアルテミス計画に日本がどう関わるのか。本気で有人をやるとなったら、今までの予算と同じようなやり方ではとてもできないという認識がある。「政府を挙げて」という表現は、これしか書きようがないということで、「政府を挙げて」と書いている。予算の仕組みそのものを変えない限りアルテミス以降の宇宙政策はないという認識である。そこまで書くわけにいかず、「政府を挙げて」という表現になっている。この言葉の意味は、したがって、大変重要だが、どこまで理解してもらえるか。さらに、具体的に、日本の宇宙が世界に向かって何を発信できるのか。一番重要な柱はサイエンスだが、サイエンスの部分が、過去5年を見ると何となくしぼんでしまった。そこで、改めてここでもう一回光を当ててやっていこうという姿勢を示し

たというのは大きい。しかし、これは実際には非常に難しいと思う。今、予算の仕組みそのものが変わらない限り、今までと同じような格好でやっていくと、結局、サイエンスは縮小していつてしまう。日本が世界に誇るべき宇宙は、実態として何もなくなっていつてしまうのではないかと危惧している。これをどうやって具体的に維持していくかというのが、これから10年、非常に大きな問題だろうと認識している。これをどうやって実現していくのかというのはなかなか大変なことである。コロナで世界情勢が一変してしまったので、予算はかなり厳しくなると思うし、そういう意味で、SDGsや地球規模の課題に宇宙がどう関わるのかということは、新しい大きな問題としてこれから10年では考えるべきではないか。その具体的なところはまだ書き切れていないが、それを検討していくのが今後の課題である。

○中須賀部会長 委員長、何か一言いかがか。

○葛西宇宙政策委員長 いや、特にない。

○中須賀部会長 これからが本当に大事だということで、身の引き締まる思い。私が一番最初この基本政策部会を立ち上げたときに幾つか危機感を紹介し、私の頭の中では、このままでは日本にとって厳しく、相当頑張らなければいけないところからスタートした。様々な方から意見を頂き、その危機感がさらに強くなった。皆も同じような危機感を持っているということが分かったのと同時に、これは戦略を立てれば何とかできる分野もある、まだまだやれることがあるということも相当感じた。そういったことをこれからやっていけるような基本計画ができた。これをベースにこれからやっていかなければいけない。そのインプリメンテーションがこれから始まる。そういう身の引き締まる思いでいる。人とお金。お金がまず必要ということと、やっていくための人材がまだ育っていない。これをつくっていかねばいけないということと同時に、戦略性と継続性がとても大事である。様々なプロジェクトがプロジェクトで終わって、プログラム化されていない。すると、成果が出て終わり。そうでなく、継続して、どんどんその分野を強化していくようなプログラム性、継続性が必要。また戦略性については、お金がないところでどうやって戦っていくのかという戦略性。それからお金がないところで外からどうやってお金を取ってくるのかという戦略性も必要である。そういった事柄が非常に大事ということを改めて認識した。これから工程表づくりが始まる。皆には引き続き工程表をつくる中でまた支援を頂くことになるが、頑張って日本が世界と勝負できる、あるいは世界に勝てるような宇宙の世界をつくっていききたい。以上で一通り皆の意見も頂いたが、1つ白坂委員から出た意見について相談させていただき、あとは部会長の私に一任ということで、事務局と最後相談してまとめたいと思うが、よろしいか。

(「はい」と声あり)

○中須賀部会長 それでは、そういうふうにして、来週の月曜日に宇宙政策委員会で報告する。最後に和泉総理補佐官から一言頂きたい。

○和泉補佐官 せっかく基本計画ができたので、平副大臣とともに各省に対してしっかりとこの計画の実現のために汗をかくように、啓蒙する。説得する。褒める。金をつける。しっかりと協力してもらいたい。その次に、この場でも関係する各省が増えてくるのはいいが、ただ並べるだけではかえってばらばらになってしまう。総務責任体制になってしまうので、工程表をつくるときは、ちゃんと星をつけて、おまえが責任者だと必ず指名したほうがいい。それは事務局にも言っており、工程表の段階ではそういった作業をしてもらって、ちゃんと責任者を決めることもしていきたい。実現するときはそういうことが一番大事と思う。

○中須賀部会長 力強いお言葉をいただいた。平副大臣からも一言お願いしたい。

○平副大臣 私は途中から参加したが、そもそも自民党で成長戦略をつくっていたので、そろそろ成長戦略の柱に宇宙を入れようと思っていたら、たまたま内閣府の副大臣で、宇宙担当になったということで、いろいろ発言した。防衛においても国の果たす役割は大変重要であり、サイエンスも重要である。しっかり果たすべきところは果たしていきたいが、一方で、担い手の多様化をしっかりしていかなければいけないし、資金調達の多様化をしていかなければいけないし、そのために世界に通じる言葉で話をしなければいけない。SDGsの中で我々は何を貢献するのか。その文脈をしっかりとすると、世界の大きな ESG 投資の潮流のお金も引っ張れるのではないかと。我々は政務なので、これからやるべき仕事は、私は IT も担当しており、宇宙空間とサイバー空間両方担当しているので、IT 分野との連携や、科学技術も担当しており、防災分野での連携というものをしっかり進めていくということと、内閣府、内閣官房は各省庁連携の調整役をやっているもので、これから基本計画を進めていく上で、各省としっかり連携をしながらやっていく。さらに、宇宙と言うと、一般人や多くの政治家は、夢があつていいよねという話になり、担い手は国家と思われるが、そうではなく、我々の日常生活に欠かせないピースにもう既になっていて、それがもっと大きくなっていく。また、国家のみならず、ベンチャーも含め様々な担い手、資金も多様化し、1人でも多くのローメーカーに理解してもらわないといけないし、国民にも理解していただかなければいけない。つまり、私の役割は、成長戦略としての宇宙を定着をさせるということ。我々は政府に入ったり、党に戻ったりの繰り返しなので、持続的にそういう役割をしっかりと果たしていきたい。いい計画案の段階で、これから正式な案になるので、しっかりとそれを実現できるように政務は力を合わせて頑張っている。

○中須賀部会長 また力強いお言葉を頂いた。よろしくお願ひしたい。それでは、委員においては、10月からスタートし、約半年間この議論に参加いただきありがとうございます。それから各省庁もいろいろと相談に乗っていただき、いろんな計画立案に参加していただき、ありがとうございます。これを物にしていくべくこれからも頑張るので、引き続きの協力を賜りたい。それから、多くの産業界、研究機関の方々、大学の方々にも御協力いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

以上